

第 5 期町田市民文学館運営協議会第 4 回議事録

- 開催日時 2021 年 12 月 7 日（火） 18：00－20：00
- 開催場所 町田市民文学館 大会議室
- 出席委員 渡邊正彦（会長）、竹内栄美子（副会長）、阿部哲也、熊谷玄、瀬川ゆき、長尾洋子、名取玲子
- 欠席委員 平井宏典、工藤成
- 事務局出席職員
野澤茂樹（館長）、加藤剛、神林由貴子、小泉仁美、山端穂、谷口朋子
- オブザーバー 1 名、傍聴者 2 名

- 資料
 - （資料 1）新型コロナウイルス流行前・後比較
 - （資料 2）2019 年度事業一覧
 - （資料 3）2020 年度事業一覧
 - （資料 4）2021 年度事業一覧

【次第】

- 開会 館長挨拶
- 議事
 - 1 討議

(1) 新型コロナウイルス感染症流行前と流行後の事業実施状況について

【事務局】「(1) 新型コロナウイルス感染症流行前と流行後の事業実施状況について」、配布資料に基づいて事務局から説明

【議長】いままでの評価を踏まえた上で今後のことを考えていく必要がある。これまでの状況についてご意見・ご質問等があれば出していただきたい。

【委員】大変な中でよくやっていると思う。このような制限せざるを得ない状況はどこ施設も同じで、人数が減ったということは対外的には致し方ないことで強く言われることはないと思う。実際、資料をみると企画展の来場者は戻ってきているように感じた。

【委員】せりがや宝さがし大冒険は素晴らしいことだと思う。前々回に芹ヶ谷公園に AR で何かを隠しておいて、そこを拾いながら文学館で発表するかネット上でそれを発表するかという提案をしたが、それに近いと思う。皆が便利だと思っているデジタルを使いながら、実際にオフラインで歩いて探していく実態があると、より参加者が増えるのではないか。「そういう融合した考え方でことばらんどは未来を設計しています」みたいのが出てくればよいと思う。

(2) ポストコロナ時代（アフターデジタル）を見つめた事業展開について

【議長】文学館では去年のコロナ禍の中で我々が想定したポストコロナ、アフターコロナの状況が思ったほど現在進んでいないのではないかという現状認識があるようだが、そのあたりのことも踏まえて今後文学館の進むべき方向についてご意見をいただきたい。

【委員】前にここで議論した時にいろいろな提案があって、それが結構実現されているように思った。前回提案のあった「言葉の樹」ではないが、ショートショートも応募が多数あって、コロナの中で健闘していると思った。図書の貸出が減っていないということについては、コロナが功を奏したところがあるかもしれない。原稿用紙の展示は、手作りで取り組むようなものに興味があるのかなと思った。

【委員】最近の展覧会は、体験型で参加した人が自分で作るとか関わるとかそういうのが良いと思う。今までの展覧会より方向が豊かになってきていると思った。

【委員】ジオラマのアトリエ minamo さんは、この商店会の中で知る人ぞ知るアトリエで、商店会としては特徴のある商店会ではないが、こういうキラッと光るお店がある。これまでは文学館まつりで協力していただいていたが、その効果もあって、のりもの絵本展の時はすごく小さな子たちがいっぱい来てくれた。商店会として協力したという感覚ではないが、地元の民間の力がこういうところで役に立っているとすればとても良いことだと思う。範囲は狭いがすごくリアルなつながりを結べているのではないか。

【委員】このコロナになった2年くらいでいくつか関わったアートイベントなどをして、コロナになって数は減ったが、それでも来ている人たちは本当に必要としている人たちだという実感があった。今まで当たり前と思われていた評価指標を組み替え直す良い機会だと思った。例えば、図書館の本の貸出数ではなくて、どんな本を誰が読んでいるかという変遷が分かるとか、来ている人の滞在時間やその人がどこにいるのかとか、そういうことが評価指標に大きく影響してくると感じた。文学館でも文学館ならではの評価方法を文学館が決めていくような、そういうフェーズに入っているのではないか。来館者数や所蔵数ではなくて、そこで起きた一人一人の体験みたいなものを評価指標につなげて、ここならではのユニークな評価指標で評価できるようになっていくと良いと思った。

【委員】世田谷文化財団は世田谷区の指定管理者で、5年おきに提案書を出して厳しく評価していただき、選定していただくという手続きを踏んでいる。その評価軸の中で来館者数はどうしても避けられない。ある一定程度の人数に来館していただくことは、税金で運営している以上、地域の皆様に「これだけ貢献している」「これだけ利用していただいている」ということをある一定程度乗り越えていかなければならない部分はある。ただ、そこにプラスアルファの評価は、様々な形のご意見があると思う。アンケートの

様々な声の分析や、最近ではツイッターやインスタグラムでいろいろなご意見を言うくださる方がいるので、そういったご意見はアピールのポイントとしてかなり有効であり、重要である。そこの評価を自ら作っていくことも必要なのではないかと思った。

【委員】新たな指標を検討するのはとても大事だと思った。資料1から新たな指標を導き出せるとしたら、例えば「SNS、情報発信の推移」「つながる連携事業の件数」「ショートショートコンクールの応募件数」などを数字的に盛り込んでいって、質的なところをもう少し細かく設計していくという方向性があり得るのではないか。図書貸出件数が増えていることは文学館にとって有利な要素で、例えば SNS と図書貸出事業を上手く結びつけることができないか。一般的な傾向を探るためのものではなくて読書体験を可視化、言語化する一つのサンプル的なものでもよいので、新たな方式で声を集めるとか、シェアするとか、指標として活用するとか、質的なリアクションがデジタルで返ってくるような仕掛けを作れたら、そこに一つの道があるのではないかと感じた。プロセスを記録していくことも多様性を確保していくということで、数値的なものとは別な指標が出来てくるように感じた。

【オブザーバー】今やっていることは、どうやって体験してもらえるか、体験をどうやって勝手に広めてもらうことができるか、そこを一番意識している。基本的にはどんな体験をしてもらうかということが一番重要なことで、それがビックリするようなことである必要はなくて、その人にとって良かったという体験を残してもらうことがテーマである。例えば、宝さがしも AR が使えていけばさらに素敵な経験があって、それを皆に広めてもらえるみたいなこともあると思う。短歌を双方向でやるというのは良いアイデアだと思った。

(3) 芹ヶ谷公園芸術の杜パークミュージアムとの連携について

【事務局】「(3) 芹ヶ谷公園芸術の杜パークミュージアムとの連携について」事務局から説明

【委員】前々回に、芹ヶ谷公園のいろいろな場所に AR の歌詞になるようなものを載せておいて、それを拾い集めて、文学館に来て歌を作るとか、公園に季語やお題を隠しておいて、公園を歩きながら、自然を感じながら詠んだ俳句を（ハンドデバイスに）載せると、文学館に来て web カメラで見ると樹が出来ていて、短冊に自分の俳句が残るとか、言葉をモチーフにしたアイデアで体験を重ねていく、ハンドデバイスは今ほとんどの人が持っているので、それを駆使して、ここに来て面白い体験が出来て、それを発信していくことで、存在感が上がるのではないかという提案をした。体験型で参加しているのはニーズであり、ニーズが強いものが来館者数やアクセス数のアップにつながっていると思う。ハルミン展を拝見して思ったが、

展示物は最高だが、はたしてあれをじっくり歩いて全部読んでというのがどこまでアナウンスメントされていて、どこまで伝わっているのか。例えば、角川武蔵野ミュージアムでは iPad が配られて、そこで指向性の強いスピーカーの前に立つと音声案内が流れるという工夫をしている。それが叶わないのであれば、体験型で何かをすることを考える。そういうことをすべきではないか。コロナが落ち着いたらもう一度戻そうという感覚があるかもしれないが、実はもう元に戻れない。戻れないのであれば、ニューノーマル時代に何をやるかという、リアルが大切ということが分かったのだから、例えば展示をデジタルと一緒にやるかを考えるべきである。

【委員】今の話を聞いて触発されたが、例えば展覧会の関連企画をこれまで沢山してきたと思うが、デジタルを使ったものはしてこなかったと思う。過去の展覧会とか展覧会関連企画をもう 1 回取り出してみて、今の現役高校生とか現役大学生とか専門学校生に、この題材でデジタルを使ってどのような関連企画を考えられるかというワークショップをやってみて、その発案してくるものをみてみたら面白いのではないか。それを学芸員が実際に企画をするときにアイデアを活かして、若者たちのデバイスの使い方や特徴を取り入れながらやっていく。そういう連関が生まれてくると良いと思うし、ワークショップに参加した若者たちを実際に展開する企画に呼び込むことが出来る。そういう回路を作っていくことが出来るのではないかと思った。

【委員】これからの公園は、何となく来て何かするのではなくて、ここで何かやりたいということをしつかり受け入れられるような場所であるべきだということで考えてきた。これからは、コンセプトブックを作成したので、これを見ながらやりたい人に手を挙げてもらって、その人たちに活動してもらおう。そういうことをしながら、より使いやすい公園にしていこうと考えている。ミュージアムという概念が、何かを展示するのではなくて、市民の活動こそがアートではないかという考え方で作っている。話に出ていた AR はぜひやっていただきたいと思う。今はコロナなどで Future park Lab の予定がないが、文学と公園を描き直す良いチャンスではないかという気がしている。

【議長】公園にデジタルコンテンツを張り巡らして、その拠点として文学館を位置づけ、芹ヶ谷公園と連携していくということですね。

2 その他

(1) 第 5 回運営協議会の確認

【事務局】第 5 回は 3 月末に実施したいと考えている。3 月 22 日か 29 日あたりで考えている。今日欠席している委員のご都合を伺いつつ、日程を決定して連絡を差し上げるので、よろしく申し上げます。